

は決して奇異にはひびかなかつた。そういえば、徹吉が一高、帝大に入学できたたびに養父はよく言ったものだ。「徹吉、おまえは偉い。ひとつ金時計をくれてやろう」——そして松の根本に坐っている老いた徹吉は、あの調子のよい養父の言葉が、まさまじと、すぐ近くで、すぐ耳元で聞えたような気がした。

いま徹吉は——その当時こそ一度も貰うことをしなかつたけれど——金時計をチョッキのポケットに入れていた。基一郎が死んだとき遺品として貰い受けたものである。鎖つきのその懐中時計を引きだし、びちりと音を立てて蓋をあける。時刻は四時をいくらか廻ったところだった。徹吉はそのまま懐中時計の長い秒針がこちこちと廻ってゆくのをしばらくの間見つめていた。

秒が分となり、その分がやがては時となり一日となつてゆくのだろう。こうしてみると時間の経つのはそれほど早くはない筈なのに、しかし刻は実際にはなんと早く流れるものである。それもすべてのものをこれほどまでに空虚におし流して。

突然、おれの生涯はもう終つた、という意識が強く襲つてきて、徹吉は頭が胸につくほどうつむいた。故国は徹底的に戦いに破れ、わずかにこの自然が残っている。そして老いさらばえた自分の人生ももう終りといつてよい。

気負つて、心たかぶつて、精根を傾け勉強をした自分は

どこへ行ったのか？ 両拳をわなわなと震わせて、講堂から去つてゆくエミール・クレベリンの後ろ姿を覗みつけた自分はどこへ行ったのか？ 更に幾千という夜な夜な、小さな蟻が巢穴を形造るように、営々として『精神医学史』の稿をついだ自分は？

太陽が移動をして、徹吉の坐っている場所は陰になり、彼はかすかな寒気を覚えた。しかし彼はその姿勢を動かさなかつた。

『精神医学史』——あれは血肉をかけた自分の子供ではある。なんらかの自負があつた書物と共に自分にはつきまゝつていたものだ。しかし、今、自分は多くの犠牲をはらつて生みおとしたその書物を誇らうとは思わない。愛してはいるが、誇らうとは思わない。あれは果して自分の子であるか？ あれは多くの学者たちの産物で、たまたま自分がそれを育てたにすぎない。自分がやらずとも、いずれは誰かがやったことであろう。それにしても、感情的にいわせてもらえば、あの本はやっぱりわが子のようなものだ。

わが子？ 峻一、藍子、周二よ、と徹吉は思った。自分はおまえ達にとつてよい父親ではなかつた。何もかまつてやれず、むしろお前たちを不幸に陥れた。だが、これがわかつて貰えるだろうか？ 決してお前たちを愛さなかつたというのではない。だが、何かが、自分の生れつきが、性格が、なにか諸々のものが、ある宿命のようなものが、物

事をこのように運んで行ったのだ。だが、弁解はすまい。自分はたしかに冷たい父親であった。世間のよき父親ではなかった。そのように何者かが自分を動かしていったのだ。そうして、そのままに今その生涯が過ぎようとしているのだ。

愚かであった、と徹吉は思った。自分は、——自分の一生は一言でいえば愚かにもむなしいものではなかったか。あれだけあくせくと無駄な勉強をし、そのくせわずかの批判精神もなく、馬車馬のようにこの短からぬ歳月を送ってきたにすぎないのではないか。いや、愚かなのはなにも自分一人ではない。賢い人間がこの世にどれだけいるというのか。自分の周囲、少くとも検病院に暮していた人々は、有体にいえばすべて愚かであった。誰も彼もが愚かであった。だが愚かなら愚かなりにもっと別の生き方もできはしなかったか？ 少しは妻ともなごみ、子供たちをも慈み、せめて今の意識をもう少し早く持つことができたらしめたとしても、自分はなんと奥底まで疲れ、気弱になつてしまったことだろう。

誰かここに人がいて、それでもお前はお前なりによくやつたと言ってくれぬものか？ 教えきれぬ慣れな難事に悩まされながら、自分はともかく病院を再建した。一方では、一開業医の身であつて、こつこつと資料を蒐め、夜も寝ずに読み、整理し、纏めていった。その病院は今では灰と

なり、生涯の最後の仕事と思つていた資料は焼失してしまつたが、だが、それは個人の力の及ばないことだ。とにもかくにも、自分は自分なりに励んできた、働いてきた。それをも愚かなことといつて悔いねばならぬのか。たとえ調子のよい養父の基一郎でもいい。ここに出てきて、ひとことこう言ってくれぬものか——「徹吉、お前はよくやつた。もう一つ金時計をくれてやろう」

そんなことが起らぬことを徹吉は知っていた。

日が斜光になり、急速に辺りの気温が下つてゆくようだった。まだ木々の梢は一日の最後の暖かそうな日を受けて諸葉を輝かしていたが。

晩秋の山の静寂。そしてなんと親しみぶかい、しみじみとする、いくら見ても飽かぬ色合だろう、と徹吉はその黄葉紅葉を見やりながら思った。歐洲の秋にはこのような紅葉はない。これは日本のものだ。わが故国のものだ。そういえば自分は遙々とヨーロッパくんだりまで勉強に行つたものだった。すべてが夢のような気がする。敗戦後のドイツで、他の留学生たちが贅沢をしている中で、労働者にまじつて塩水のようなスープをすすり、皮革のような肉を食へ、浮いた金で書物を買つたものだ。そう、古い鈍い（ちひ）の寺院に鴉が群れているのを長いことひとりで眺めていたこともあつた。それから、一面に粗い布でも擦るように一種きびしい音を立てて流れている凍りかけたドナウの川面……。